

地球に降り立つことへの7つの反対理由

『クリティカルゾーン：地球に降り立つことの科学と政治学』序論

近代の社会政治と自然科学の関係性について再考し、アートシーンにも影響を与えてきた

ブリュノ・ラトウール。ドイツのカールスルーエ・アート・アンド・メディア・センター（ZKM）にて予定される

気候変動をテーマとした展覧会のカタログ序論として著された、地球の新たなとらえ方と

「クリティカルゾーン」の概念について説くテキストと、本展スタッフがグループに参加してきた訳者による寄稿。

ブリュノ・ラトウール 文

鈴木葉一 訳

皆も学校で習った通り、宇宙の秩序内で地球の位置付けが変更されると
きには、一緒に社会秩序も変革されるものだ。ガリレオの一件を思い出そ
う。天文学者たちが地球に太陽の周りを廻らせ始めたとき、社会構造の全
体が、まるで総攻撃を受けたかのように感じたのだ^{*1}。それから4世紀
を縫たいま、再び、地球の役割と位置付けは新しい学問によって変革されよ
うとしている。どうも人間の振る舞いが、想定外の反応をさせるまでに地
球を追い詰めてきたらしい。それにより、社会の成り立ち全体がまたしても
ひっくり返されようとしている。宇宙の秩序を揺るがせば、政治学の秩序
も揺らぐ。ただ今回は、地球に太陽の周りを廻らせるのではなく、地球を

どこかまったく別のところにやっつけてしまうことが課題である。それもまる
で、どうしたらそこに降り立つことができるか見当もつがないくらいに。

「地球に降り立つ？ 誰がそんなことをしようとするっていつんだ？
だって皆地球にいるじゃないか？」

いやいや、全然！ そういう問いを持つ読者に実情を説明することこそ、
本書の狙いである。地球的 (earthly) であるということの意味につい
ては、以前からいくらか誤解があったようだ。この語が「現実的」「世俗的」「非
宗教的」「物質的」あるいは「唯物主義者」を意味すると思っているなら、あな

めばわかるように、形容詞「クリティカル」はいくつも意味を持っている。科学者たちにはそれぞれ違った考えがある。「熱力学の平衡からは程遠い」「毀れやすい」「水化学」「インターフエース」「守られるべきもの」もしかすると急に「ティッピングポイント」を越えてしまうかもしれないもの、等々。ただ誰もが強調しているのは、まさに「惑星・地球」という概念は——その天文学的または地質学的意味において——私たちが住んでいる場所を示すには不十分であること、そして私たちにとって致命的な事象のすべてを取り込むには別の枠組みが必要だということである——ここで言う「私たち」とは、人間以外も含めすべての生物を指すのだが。

事実、この惑星を球体状のチキユウとしてとらえると、クリティカルゾーンはあまりの薄さに見えなくなってしまう。地球を惑星として、つまり地球儀のような形で想像すると、まるで自分が宇宙空間からそれを俯瞰するような格好になってしまうのを憂だと感じたことはないだろうか。確かに、何十人かの宇宙飛行士はメカだらけのスペースマシンに乗って宇宙に行ったことがあるし、地球の写真も何枚か撮つたには違いない。だがそれは人間の住む場所ではないし、ぶだん目している景色ではない。だからクリティカルゾーンという用語は非常に有効なのだ。それは私たちの想像力を、あのやたらに知れ渡つた青い地球から解放してくれる。私たちは宇宙人ではない。私たちは厚さ数キロメートルに満たない薄いバイオフィルムのなかに生きていて、そこから逃れることはできない——しかもその薄い膜がとんなりアクション(化学変化、地質学的機構や社会への影響)をしてくるのかほとんどわかつていないと「クリティカルゾーン主義者」なら付け加えるだろう。

本書においてなぜ私たちがクリティカルゾーンという語に夢中かということ、たんにそれが惑星・地球の地図製作法的な見かけを崩せるからという

だけでなく、同時にあらゆるグローバルな世界観の法的・政治的な統一性を複雑化し、妨げるからだ。画面上の地図を何度もクリックしたり、見せかけのチキユウをあまり頻繁に眺めているがための職業病として、人々は地球を滑らかで単一で均質なものと信じ込んでしまう。だがそれはまるで魔法の杖を「振りされたかのごとく球体上に投影されたデータ群のせいなのだ。私たちはそのチキユウが決して画面や紙切れより大きくないことを忘れるべきではない。その図像は本来それが表すべきものを包括してはいない、単なるデータの寄せ集めに過ぎないのである。

つまり、惑星・地球の代わりにクリティカルゾーンについて語るこの大きな利点は、地球システムの細々して毀れやすいか、それの諸モデルと問題の惑星をさっぱりと単一化しようとする科学的取り組みや、とくに政治的な企てとを混同してしまう誘惑に陥らずに済むことだ。これこそ、球体としてのチキユウのイメージによって身動きが取れなくなつてきたエコロジ派の人々が抱える悩みの種だったのである。反対に、「クリティカルゾーン派」としてはゾーンは不完全でむらのある雑多ではばらばらなのである。本書を読み進めるうちにわかってくるはずだが、これらのむらほど議論の種になるものはない。そういうわけで、私たちの計画では可能ながぎり、あらゆるゴム風船の球体が、ほぼヤサイズの「母なる地球」、青い地球、「グリーンなんとか」を使うことを拒み、その豊かさをとらえるための観測点の数を増やすよう試みている。より謎めいた色が私たちのカラーだ——あるいは少なくとも、まだら模様がい

ある問題の解決を政治に望むなら、解の組み立てに単一の「自然」を当てにしてはならない。私たちはそれを自分でしなければならぬのである。少しずつゾーンごとに、一片一片。ショートカットのコマンドはない。

逆にそれはそう難しいことではないだろう。少なくともここで言う「読者」が、ありうる読者のうちでもとくに近代の、あるいは近代化された人だとしたら。

「近代」の人々の定義として、自分が住んでいない場所から生の糧を得ている人々、と言えはかなりの確だろう。少なくともその人たちはふたつの世界のあいだで生きている。ひとつはその人たちの習慣、法の保護、不動産証書、国家による補助がある場所つまり自分が住んでいる世界。それに加えて、影のようなふたつ目の世界、遠く隔たり、法の保護も明確な所有権も国家による権利保障もないことによつて利益を喰ひ取っている世界がある。これを自分の生の糧を得ている世界と呼ぼう。近代化主義者たちはつねに後者の世界を無視しながらも、自分たちは前者の世界にだけ住んでいるのだという幻想を維持するのに必要な資源を、そこから引き出してきた(Charbonnier)。近代人というのはいつも不在地主のように振る舞ってきたのである。

これでは近代性の定義を脚色しすぎているというのであれば、新気候体制に関わるデータを大量に集計した科学者たちのおかげで知れ渡ることになった例のホッケースティック曲線を見てみるのが良いだろう。このグラフはここ数年で「大加速」と呼ばれるようになったものを表しており、長いスパンで言えば、地質学者が完新世と呼ぶ過去1万2000年のほぼ水準に推移したラインから、人新世と呼ばれる垂直に伸び上がるラインへの急激な変化するを示している。グラフを突き破るほど急上昇し続けるその線は、科学者たちが疲れ果てるほど説明し尽くしてきたものであり、聴衆にとつては見るも恐ろしいものである。1950年代、このグラフが「離陸」していったとき、国々がどんなふうに「開発」発展への道を歩もうとしていたか覚えているだろうか？ はつきり言つて、ここではもはや発射とし

か呼びよらない何事が起こっている。近代化主義者たちは、どこから生の糧を得ていたにせよ、自分が住んでいる世界と糧を得ている世界との紐帯をすべて切り離してきた。重力から逃れてきたのだ。長い水平線、急激な変化、そしてほぼ完全な垂直線。こうした図はすべて、あの熱狂的な時代精神のしるしである。

しかしながら、さらに歴史を詳しく見てみると、近代化主義者たちの生まれつきの「過在性」あるいは「二重性」は、最近だけの現象ではない。実際それは長く存在してきたので、1610年、1789年、1945年、どれを始点に選んだとしても大した違いはない。何エーカーもの経済圏にずっと離れた土地にあるより多くの「ゴースト・エーカー」からなる仮想経済圏を付け加えることが、植民地主義、奴隷制、輸送と技術の複合事業によつてひとたび可能になれば、もはやふたつの世界の隔たりは広がり続けるばかりだからだ。空間においてのみならず、時間においても(Etzel)。限られた資源をやりくりする科学だった経済は、あらゆる限度を忘れるための議論になったのである。とくに石炭と石油、天然ガスという、地中深くに隠されていた真の「お化けエーカー」によつて、エコノミストたちはついに無限を手に入れたと感したものだ——ついに、と言つても、再び有限性と向き合わなければならなくなるまでのことではあるが。

現在の悲劇にある種の暴力がついて回るのは、地球が人間の行為に回答し始めたために、あのふたつの世界がこれ以上離れたままではいられなくなったからである。近代化主義者たちは突然、自分が奈落の上に不安定な姿勢で持ち堪えていることに気付く。自分の生の糧を得ている世界が、自分の住んでいる世界のただなかに侵入してきている。こうして、まったく見慣れないもの——このエイリアンたちはどこから来たんだ？——であると同時に、実は恐ろしくも旧知のもの——それらに依存していたことは

なっているということだ。人間の語彙層は種々の直感に反した仕方です。これまで軍事作戦のフィールドとして以外認識されていなかった存在たちに巻き込まれている。私たちは、害虫との戦いについてはいくらか覚悟があるとしても、虫たちとともに、虫たちのために戦うことにはまったく覚悟がないはずである(宮崎駿監督の『風の谷のナウシカ』を除いては)。天候が戦いの勝敗を左右することは知っていても、気候のために誰かを倒す戦いに勝利することの意味は知らない。要塞をつくるために樹木を伐採する経験は長年積んだが、樹々とともに、樹々の継続的な繁栄のために、ある人たちを名指して敵と認識し戦うことの新鮮さをどうしたらのみ込めるかはわからない。前線すらはつきりせず、勝つべき側も負けるべき側もよくわからない状態では「戦争の大義名分」という体裁を保つことさえできそうにもない。

しかしこれが惑星規模でどちらかが殲滅されるまでずっと続く戦争であることに疑いはない。20世紀は「世界大戦」に事欠かない時代だったが、この新しい戦争と比べてみれば、それらはいくつもの区切られた戦いだつたように思える。それらは惑星全体をこんなふうには巻き込んではいなかった。地球はあくまでゲーム盤であつて、参戦者ではなかった——なのに失うものもとても大きい存在であつた。今回も地球は統制のとれたチームというわけではない。それはあらゆる単一に抗う集団なのだ(Surge)。人々が何を攻撃して何を守ればいいのかわからなくなっているのも無理はない。

ついでに言えば、一部の富裕層が何もかもから脱退してまったく別の惑星に行くこととしていることにも不思議はない——「チャオ、貧乏人ども！火星で会おう！」。いま、いわば「取り残されている」私たちにとって火急なのは、前線を単純化することではなく、将来の参戦者たちがこの戦いの前

線を正しく描き出すのに必要な装備を用意することだ。描写のフェーズをスキップするわけにはいかないのである。

「じゃあ、そいつらは火星に行ってもらおうしよう。ただ、この政界も、境界を閉ざしてアイデンティティを固守して古い国土に帰しようって叫んでいるよね。そんなときに『土地に落ち着くこと』や『故郷を守ること』を主張して大丈夫なのかな。つまり、『血と土』的な反動と危ういほど似ているように聞こえるけど」

忌憚ないご意見に感謝しよう。その批判は私たちのプロジェクトの前途にとって吉兆ではないが、「危ういほど似ている」ことは重要な点だ。結局、火星に移住する案は非現実的だと思つたとしても、それなら祖先たちの眠る土地に戻る案のほうがまだ現実的だと思ってしまうわけだ。国家の保護に帰しようという、昨今見られる「血と土」への反動的な動きは、魅惑的な大気圏外への脱出と同じくらい非現実的ではあるが、保護を求めること自体には「理」ある。「世界をまたにかけて」生活する夢が消え去つたいま、場所なしで生きること拒む人々をもう排除するわけにはいかない。ある場所を占めて、土地の上で、土から糧を得て生きることが何を意味するのか。この問いはいま再び重要なものとして聞かれている。自分が住んでいる世界と自分が生る糧を得ている世界との分裂を回避したいという願いは、道徳的には非の打ち所がないものである。別の何かが問題なのだ。これこそ、私たちが「地球的政治学」というタイトルで探求していきたいものなのである。

クリティカルソーンという語が科学的かつ政治学的に強い訴求力を持つのは、ある土地が「自分の」土地であると言つた場合に、じつは自分がそれについてほとんど何も知らないことに気付かせてくれるからだ(Vanuxem)。

し付きの「生」であり、確かにいくらかの同種の仲間たち、つまり動物や植物、細菌を含むが、それらと一緒に生命のリストには数えられない、多くの他の同居者たち——大気、土壌、岩石、海洋、雲、鉱物、大陸——をも含む。これらは生命体によって長い時間をかけて変質させられ、移動させられ、生成させられ、居住され、発明されてきたものでもある。こうしたすべてがクリティカルゾーンを、またはある人々が自分の「領土だ」と思っている諸ゾーンを成す材料である (DeFreije)。

考えてみれば、私たちはガイア以外のどんな居住環境も経験したことはない。ガイアのなかで生きるといことは、「自然のなかで」生きる人間になるということではない。ガイアはまったく独特な現象である。少なくとも別の事例がないという普通の意味で独特であるだけでなく、文字通りあらゆる障壁を超えて自己創出されてきたということ、そしてさらに重要なことには、メタレベルのモデルや指示なしにそうしてきたという意味で、独創的なのである。それでいて、ある種の自己抑制が働いている。ガイアの自己創出性を理解すればするほど、「メタレベルのモデルも指示もなしの」政治学の新形態を創案できるようになるだろう (Cocchia)。自己抑制に関しては、文字通り取り組み中なのだが。

人新世の時代に生きるならば、人類に対して、完新世の時代と同じような要求をするわけにはいかない。着陸しようとする地球は、それまで考えられていたチキエウとこれも異なっているわけだから、いま多くの人が退却したがっている幾重にも変質化された国土とはなおさら異なっている。

ガイアがこれほどまでに独創的なコンセプトであるのは、全体と部分について対極から問いつづけたふたりの科学者たちの共同発明だったからだろう。大きいほうの極から考えたジエームズ・ラブロックと、小さいほうの極から考えたリン・マーキユリスである。小さいほう——微生物——は大

きいほう——大気——を保っており、また大きいほうは小さいほうによつて成り立つてもいる。このふたりの発見によつて、それまで唱えられていたスケールを拡大したり縮小したりできるマトリョーシカ式のモデルは維持できなくなってしまう。本書ではこの変化を指し示すキーワードとして「テレストリアル」を使っている。そのもっとも重要な特徴は、何かと何かが隣同士にあつて、そして協力的にせよ、競争的にせよある種の関係性を結ぶ、といった順序の物事から構成されているのではないことである (Stengers)。そもそも、微生物や動物や植物はそう単純にある固まりや単位に分けられるものではない。何が部分で何が全体か、そのすべてが問いに付されている。どの細胞も社会も、気候も。

この新たな区分法は、アイデンティティを持つことの意味を変容させる。ある場所に属すること、様々な能力を他者と共有すること、自分と異なる「伴侶種」とともにあること——つまり、命を持つとはどういうことなのか、生きものであるとはどういうことなのか、という問題になつてくる (Despret)。ある土地を「所有する」ことの意味もまた、絶対に解けないパズルのようなものになる。物質性の概念が変化したことにより、身体を持つことの意味も新たに考え直さなくてはならなくなつた——それに伴い、政体を想像することが意味しうる内容についても再検討が必要になる (De Vries)。自然法則は新しい原則を募集 중이다。「群」体の集合と個別の有機体の集合とは異なるはずである (Tower)。募集要項が以前と同じではないので、採用結果もまた違つたものになるだろう。

そうだから、私たちは避けることができない。グローバルに拡大していかわりに地球に降り立つことを望むなら、こんなにも多くの人が反動的な政治傾向に引かれていることを真剣にとらえる必要がある。しなければならぬのは、確かに人民と土地に再び焦点を当てることではあるが、

事が、私たちが薄明のなかに照らそうとするのと同じ、歴史の虹橋の始点を兆すものであったように感じられるからだ。未知の、未征服の、地図にも載っていない土地をファンホルトが踏査したとき、あの球体としての世界はまだ、その後の様々な問題念みの概念に付きまといわれない、理想的な展望であった。いわば地球はまだチキエウ化されていなかったのである。そして今日ではそれは、幸いにも様々な意味で脱チキエウ化されつつある。

重力から磁力、気温、高度その他に至るまで、多数の尺度の計測狂だったとはいえファンホルトが大変な努力の末に集めた大切なデータ群もあらゆる種類と形式の物語や日記、絵画、メモといった別種の努力によって描き出されなければ、図のなかに孤立した単なる点々になってしまう。このことは彼の「自然画」を読めばわかるはずだ。彼の世界はまだ多種多様で、飛び飛びの理解に隔てられて穴ほこだらけのようなものだった。彼の時代にはGPSがなかったので、そのぼらぼらさをならしてひとつながりのイメージのように見せかけることはなかった。ファンホルトは自分の足が馬車で実際にそこに行くという大きな苦難を乗り越えて自分のものにしなければならなかった風景の、そのぼらぼらさを隠さなかった。おかしなことに、同じ状況が200年後の今日になってクリティカルゾーンによって明らかにされている。しかも真逆の理由から(Brailey)。統一的支配を望むどんな夢も挫折させる激しい戦いの最中に浮かび上がる、多種多様で、ぼらぼらな、知の隙間だらけのレオパード柄のデータ。もう一度言うが、ショートカットのコマンドはない。そういうわけで本書では、各章ごとに、多様な著者たちに短い文章を書いてもらい、違ったレイアウトで配置し、諸クリティカルゾーンの特質性への経路の数を増やそうと試みている。多種多様さが基本原則だ。政治学とはすべてを統一するための見方を追求するものではなく、可能なかぎり多くの場と可能性とを探索するために散開していく

ものである。

私たちは幻想を抱いてはいない。キエレーター陣の唯一の望みは、過去の物語を見直し、より良いバージョンを観客や読者が明確に語りだせるよう(Weibel)、世界の案内地図(「コスモグラム」(Fresch))の長い歴史に新しいエピソードを付け加えることだけだ。結局これは、カタログと展示だから……。

本書は、時と場所そして役割の迷子状態(Disorientation)から着手する——動き出した地球を勘定に入れたとき、近代化主義の人間たちは、いつどこにどのような人として位置付け直されるのか？

そしてこの迷子状態を、その人たちが暮らしていると思っている土地についての種類の定義の懸隔(Disconnection)として理解してみる。自分が住んでいる土地と自分が生の糧を得ている土地。この分断によってその人たちは足場を失っている。

したがって、いつかその人たちが移住しなければならないあの土地の姿を描き出す必要がある。驚くべきことにそのような土地は、近代という幕間劇において考えられていたようなあのチキエウにも、自然にも似ていない。ここではそれを新たにクリティカルゾーン(Critical Zones)として、あるいはガイア(Gaia)として、かつてと根本的に異なる特徴を備えたものとして描き出す。そしてそれらの特徴をテラストリアル(Terrestrial)なものとして暫定的に定義しよう。

目下の状況の最大の悲劇は、私たちがどの惑星に共通して住んでいるのかという点について合意された定義がないことである。そのためにすべての政治学の根幹に関わる戦争状態(division)状態が生じている。

この「諸世界の諸戦争」に読者や観客はすでに巻き込まれている。自分

扉を開け続けること

鈴木葉二

じつは本特集の発売翌日、2020年5月8日に、ブリュノ・ラトゥールがメインキュレーターを務める展覧会「クリティカルゾーン：地球的政治学のための観測所」のオープニングを迎えるはずだった。本稿執筆時点では、会場のZKMが新型コロナウイルス感染症対策で閉鎖しており、開催に向けた調整が続いている。

記出したテキストは本展覧会カタログの序論に当たる。多くの寄稿者たちの名とともに、いまラトゥールが取り組んでいる諸問題への扉がいくつも開かれている。本展はラトゥールがこれまでZKMで行った3度の展覧会の蓄積も踏まえ、時間をかけて準備されてきた。展覧会の実制作に携わるいわゆるキュレーションチームと別個に、ZKMと同じ建物内のHfG(カールスルーエ造形大学)でラトゥールが主宰する「クリティカルゾーン・スタディグループ」が組織されていたことはその特色である。筆者はラトゥールの展覧会について修士論文を書いたことが縁で、この30名ほどのグループに席を得、2018年1月から全6回のセッションに参加してきた。渡航費には苦しいだが、切り詰めてどうにか皆勤させた。

このグループはいわば新しい展覧会を醸成させるための醸造所で、作品配置等には直接携わらないが、多様な活動を通じて関連するトピックを話し合うメンバーの集まりである。ラトゥールがその日テーブルに置く問いに応じ、即興劇をしたり、ゲストの講義を聞いたり、ご飯を食べたり、互いの研究をレポートしたり^{*1}、実際のクリティカルゾーン観測所がある雪山に遠足したりしながら、主要トピックである気候変動への関心を深め、ある雰囲気を共有してきた。メンバーの出自は様々で、一週間ずつのセッションが終われば、各自の生活に戻り、数ヶ月のインターバルを置いてまた集まる。初めは気候変動への世間の無関心について議論していたが、この2年のうちにも一段と具体的に変わった。この間、病を養った者、親族を失った者、新たな家族の増えた者があり、互いに気遣い、現実を生きながら、考え続けてきた。

このようなグループが展覧会制作と並行して存在したのは驚くべきことで、ほかにない環境だと多くの参加者は言う。適度な親密さと対等さを基調に、風通しの良い議論が奨励され、知的関心と配慮の持続があった。このスタディグループにはHfGが費用や講義室を提供し、他方、展覧会本体はZKMが国や州などの資金を得て実施するところになっている。この分担構図は、HfG学長だったジョーク・アクト・ジエリンスキーのイニシアチブとZKM館長のピーター・ヴァイベルの協力で実

現した。大学をいかに開けた環境にしていくなか、という公共的な挑戦の一環でもあったと聞いている。

ラトゥールは「リセット・モダニティ」展(2016)を念め、これまでも若手の学者や学生との協同制作をしているが、その都度今回のように、惜しみなく問いを共有してきたのだろう。その姿勢は、正解を出して議論を閉じるというより、扉を開け続ける動的なイメージが良く似合う。

別の視点を加えると、ここで体现されている公共性のあり方、つまり気候変動に対して大学や美術館が機能する構造は、近代ヨーロッパという世界の一地方を象徴した社会の特徴である。コードジボワールで人類学を学んだラトゥールは、その自覚を踏まえて「自己描写」を重視する。彼の文体は、ヨーロッパの公共性をフルスケックで実現する環境を舞台に、これがヨーロッパの最上の良心です、と演劇的に提示して見せるものにも思える。その身振りは、一見した以上に歴史的で荘重なもののように感じられる^{*2}。同時にそこには、あなただけが何か違うものを持っているでしよう、という含みがある。カールスルーエで触れた「ヨーロッパの良心」は、いままもずしりと重みをもって手の中にある。それをこれからどうやって返していこうか。



2019年1月のエクスカーション。もとは激しい雨の研究のために設けられたフランスの環境水文地球化学観測所では、ウォージュ山脈の一地区に降る雨が植生や地層を通して観測地点に流れ込むまで一連の作用を30年以上記録し続けている。クリティカルゾーン観測所と実際に呼ばれる場所のひとつ。地球化学者マリ・クレール・ピエレ (Marie-Claire Pierret) の話に耳を傾ける

*1—参加者たちは各々の関心でこのグループに関わる。私は展覧会の主催チームである「知識の委譲と社会秩序の委譲との連鎖」事例として、近世キリスト教伝来時代の儒学者林羅山と日本人儒士ハビアン¹の地球論争や、禁教政策下での禁教者の内面的屈折に関心を抱いている。地球論争については、国立科学博物館の有賀博通氏(科学史)から紹介いただいた。大阪大学の森下朝枝(科学人類学)に教わった。

*2—ラトゥールの「ヨーロッパ人」としての自己描写については、『地球に降り立つ：新気候体制を生き抜くための政治』(川村久美子訳、新評論、2019)第20章を参照された。